

明治初期における仏教教育の近代化—— 大谷派のプロトタイプの大学のケース・スタディについて

近年、日本だけではなく、世界の伝統的な仏教を再概念化することに関して、明治仏教の役割を再検討する学問が増加しています。寺請制度の廃止、神仏分離令、廃仏毀釈等の非仏教の政策ゆえに、日本仏教のヘゲモニーが終焉とともに迫害を経験しました。他の世界宗教と互いに交流した結果、日本仏教徒が近代世界の中での役割を理解し、「世界宗教」のヒエラルキーの中に組み込まれました。そして、多くの日本仏教徒にとって、アイデンティティ・クライシスの状況になりました。それと同時に、日本仏教はモダニティと国家という二つの近代化の産物とうまく結びつき、仏教は日本の宗教か外国の宗教かという点について議論し、しかも世界でキリスト教に対抗できる可能性があるかどうかを熟考しました。

仏教徒はその深刻な問題に取り組んだ結果、仏教教育について重要な議論が顕在化しました。大谷派の中で、キリスト教の宣教師と国家神道の信者の増加という脅威に対応する方法には、二種類ありました。一つの方法は、進歩的な人々が、僧侶教育における仏教以外の教えに携わり、多元化する日本宗教界を受け入れることを理想としました。もう一つの方法は、保守的な人々が、伝統的な習慣や価値観を強化させるためには、教育による宗門の根幹に戻ることが理想としました。

大谷派の僧侶教育や方向についての議論の本舞台は、大谷派の伝統的な学寮と共にプロトタイプの大学、「護法場」という機関でした。両者の議論はいよいよ攻撃的になり、結局、^{せんしょういんくわく}闡彰院空覚(1804-1871)という進歩的な改革者の暗殺事件にまで発展しました。空覚の暗殺者は突き止められませんでした。保守的なライバルの行為だと普く信じられています。その論争がこのような極端な事態に至ったことは、大谷派の人々にとってそれらの問題の深刻さの証拠として理解できると思われまふ。この明治時代に起こった新たな難題はもちろん大谷派だけではないのですが、護法場の設立を通じて、大谷派は、近代改革を組織の制度に組み入れるための実験に着手した初期の宗派の一つと見なされました。その上、何人かの護法場の卒業生が、明治後半に大谷派と新生の大谷大学の指導部の指導者になったことは、近代仏教の高等教育において影響力が増加していることを顕著に表しています。

本発表の主な目的は、歴史的なケース・スタディーを通じて、明治時代における仏教系大学の誕生とその発展について検討することです。まず、幾つかの先行研究を紹介した後で、発表の要点を述べ、続いて大谷派のプロトタイプの大学及び「護法場」という施設を説明します。その後、大谷派の高等教育に対する護法場のインパクトとその影響力を分析したいと思います。最後に、結論として、本研究が明治時代の仏教教育の変遷について、新たな洞察の可能性を提示できるかを検討します。

先行研究

明治仏教学問の中で、学者は日本仏教学の分野の思想史を自省的に調べ始めます。末本文美士や林淳や谷川豊などの日本人の学者及びジャクリン・ストーンやカスリーン・スターグズやオリオン・クラウタウなどの西洋人の学者達は、明治時代に仏教近代化のプロジェクトのために仏教学問を利用することについて様々な有益な所見を述べました。¹ 例えば、クラウタウ氏は、明治後期と大正初期の仏教歴史学の発展が日本仏教のアイデンティティの再構築の要因であったと論じました。² なお、近代に形成されたこの仏教歴史学のナラティブが、近代仏教アイデンティティの誕生に強い影響を与えました。つまり、鎌倉新仏教論や江戸仏教墮落論などの仏教史学のナラティブを利用して国民国家概念に結び付けたこと自体、僧侶改革運動の影響を受けたといえるのです。しかし、彼の研究のほとんどが、帝国大学の活動への注目だったので、仏教史学や仏教学の発展にとって仏教系大学が貢献したかどうか、そうであるなら、それは、どのようなものだったのかとの質問が残ると思われます。加えて、仏教学の歴史的研究において仏教系大学の役割が見逃されてきた事実は、問題視されるべきことです。明治帝国大学と仏教系大学の両大学の学者間には、どのような交流があったかを理解することが重要だと思えます。ちなみに、明治時代の仏教系の高等教育機関の数は帝国大学の4倍でした。だからこそ仏教系大学の研究は、今後さらに新たな視点で進める必要性があります。

この点について、林淳氏の近代仏教学の発展、及び仏教系大学の誕生とその役割の研究は有益です。林によると、仏教系の大学の役割を重視しなければ、近代仏教学の発展は深く理解できないと論じます。例えば、1918の大学令の下で正式に「大学」となった仏教系大学は、こちらの6校です。林が指摘するように、この中の6校の内4校はいわゆる「鎌倉新仏教」の宗門に属していました。その結果、大学があった宗門は、他の宗門と比べると、中心となる仏教の聖典（例えば、法華経、歎異抄、正法眼蔵）や教祖(日蓮、親鸞、道元)などの学問を誕生させました。³ また、日本仏教学会や日本仏教協会などの組織の参加を通じて、仏教系大学と帝国大学の学者に影響を持たせ、ネットワークを形成したと述べました。最後に、仏教系大学と帝国大学の制度や組織構造、そして初期のカリキュラムを比較することにより、林は、両者の大学における学問としての宗教のカリキュラム、中でも特に仏教を勉強する方法の違いを示しました。

近年刊行された、「近代日本の大学と宗教」では、仏教系の大学とそれ以外の宗教系大学の誕生と課題に言及しています。⁴ なかでも、三浦周氏はポストコロニアリズム論の洞察を行いながら、仏教学史を再考しています。具体的には、近代の仏教教育の発展にとって、国内の影響、特に国学や儒教の影響力に注目することが必要だと述べます。こうした三浦氏の研究成果を受け、

¹ Sueki 2004, Hayashi 2012と2014, Stone 1990, Staggs 1983, Klautau 2008と2012.

² Klautau 2008.

³ Hayashi 2013.

⁴ Ejima et al, 2014.

いしだかずひろ

石田一裕氏の研究は、外国で出会った日本人の学僧同士の関係性やお互いの影響について調査しています。

前述した研究には、近代仏教学と明治時代に行われた仏教教育の発展の深い理解のために大きな進展があったことが述べられていますが、仏教教育の理解のための研究がさらに重要です。今でも近代仏教学の分野においては仏教系大学についての研究が不足しているので、私の博士論文では仏教系大学を中心としており、本日は、その中の一部分、特に、浄土真宗の大谷派のプロトタイプの大学としての「護法場」という歴史分析的なケース・スタディーについて述べます。

護法場のケーススタディが示すように、護法場の斬新な教育方法は、批判的に考える能力を養うことでしたが、大勢の学生は宗派の伝統や保守的な構造に不満を持っていました。護法場の学生達は、大谷派のこうした状況に対して「時代の流れに取り残されつつある」と批判を述べました。⁵ 設立の直後、護法場の学生は東本願寺に向けて改革を促すキャンペーンを始めました。様々な葛藤の後で、結局、幾つかの改革が実現されました。護法場の比較的短い五年間の寿命を考えれば、このような護法場の改革者の成功は、高く評価すべきだと思われま

大谷派のプロトタイプの大学としての護法場

次に、護法場の歴史を分析します。その際、『大谷大学の百年史』と護法場の有名な卒業生の回顧録及び護法場の資料をもとに、ご報告いたします。

江戸時代の大谷派の僧侶教育は、学寮と安居という二種に分けることができます。学寮とは、伝統的な高等教育機関のことです。安居とは、古代インドのモンスーン気候による習慣の伝統を受け継ぎ、時代を経て摂取されたもので、僧侶が幽居し集中的に仏教を勉強する教育機関です。次に教科についてですが、基本的に、仏教儀礼とその宗義に関して焦点を当てています。しかし江戸時代以降は、仏教以外の教科、例えば国学や儒学が教えられました。資料によると、その初出は 1824 年で、「儒学の導入」というコースが実施されており、次に、1831 年には日本書紀を扱いました。1863 年、幕末の頃に、安居でキリスト教と地動説についての講義が行われました。ただしこの仏教以外の教科、つまり「外学」は通常の教科にはありませんでした。

ところが、明治初期には、仏教を批判する組織などのいわゆる「非仏教」の動きが増加し、脅威と危機感を感じ始めました。そこで、それに応えるため、高倉学寮という大谷派の高等教育機関では、外学の教科を重点的に教えました。明治以前に、外学の講義は通常仏教を講義するための普通の講堂で行われましたが、明治初期に起こった仏教への危機感の増加に伴い、仏法を聞くための講堂で外学の講義をすることは不敬なことだとの批判的な意見も多く聞かれました。それゆえ、1868 年 8 月 1 日に、本山は外学研究や教育機関の設立計画を監督するために、二人の「俗役」を任命しました。その後、二週間も経たないうちに、「護法学場」（以後、護法場と呼びますが）外学研究と教育機関の開設を祝うための演説が行われました。

⁵ 『大谷大学百年史』2001a: 46.

その際、学寮講師、^{こざんいんりゅうおん}香山院竜温 (1800-1885)は「護法」の意味の移り変わりについて説明しました。さらに詳しく言えば、従来、「護法」とは本山を守り、宗門を中心に学ぶことだけだったのですが、最近の仏教を批判するような傾向、つまり「邪見」が蔓延したため、外学に関する知識が必要だという点を「護法」の意味に組み入れることにしたと論じました。⁶

大谷派の僧侶香山院竜温と闡彰院空覚 (1804-1871)の指導の下で、1868年8月に外学を勉強するための護法場が設立されました。ここでいう外学というのは、つまり儒学、国学、キリスト教、西洋天文学の四つの教科のことです。これらは、日本仏教にとって、もっとも極端な批判者だと言えます。この文脈から見れば、仏教がこれまでにない脅威を感じた経験上、外学を再定義する過程が必要だったのです。学寮のカリキュラムと異なるにもかかわらず、学寮の講師は護法場で外学の研究や講義をすることが期待されました。その上、護法場と学寮は共同運営され、双方の機関における管理運営の指導は講師達が持ち回りで行いました。入学の資格としては、特に何も必要ありませんが、関係者の推薦が必要で、「試学」という一ヶ月の試用期間を経て、入学出来るようになります。何人かの所化（つまり学生）は護法場にのみ所属すると同時に、それ以外の所化は護法場と学寮の双方に所属しました。そのため、護法場の学生の正確な人数は不明です。

次に、カリキュラムにおける、四つの教科に注目します。その四つとは、西洋学、天文学、国学、儒学です。西洋学のカリキュラムはプロテスタント教とカトリック教の教義と歴史が中心でした。国学の教科内容は日本書紀、古事記、和歌、和文に注目しました。儒学では、中国文学と経済が教えられました。先ほど述べましたように、国学と儒学は、江戸時代から広まり始めた非仏教論への対応策として、高倉学寮で講義が行われました。しかも、須弥山などの伝統的な仏教の天文学宇宙学に対して、批判の材料として、西洋天文学、特に地動説が使われていたので、仏教宇宙学は仏教の非近代性の証拠として批判を受けました。その理由で、日本仏教界は西洋天文学の知識を得ることが必要でした。西洋天文学では、地動説だけではなく、数学と暦学も教えられました。

護法場の講師の下で、この四つの外学の講義や「破邪の要文」についての討論が一日置きに行われました。⁷護法場では、所化達が仏教の批判者に向けた受け答えの訓練がなされました。例えば、所化には相手の義論に反対する練習、つまり反駁が期待されました。さらに食堂では、「立義問答」という反論の練習が行われていました。「立義問答」とは、ある決まった話題に関連する学問的な議論のことです。「立義問答」の練習について、護法場の有名な卒業生の一人、南条文雄 (1849-1927)は回顧録で次のこと記しています：

私は（^{はなやま}花山）^{だいあん}大安寮司などといっしょに毎日通学した。破邪顕正という趣意から、闡彰院嗣講は漢訳した耶蘇教の聖典を見台に乗せ、大いに講読せられたことがある。したがって私たち寮生も仏・耶両教徒に

⁶ 『大谷大学百年史』2001a: 42.

⁷ 『大谷大学百年史』2001a: 44.

分かれ、教義の優劣を討論したこともあった。なんといっても活気縦横、好学心に燃えた当時のことは思い出しても愉快的なことである。⁸

南条の良き思い出にもかかわらず、進歩的な護法場の改革は保守的な本山の指導者の間に葛藤を引き起こしました。護法場が設立された直後、本山は護法場を何度も移転させました。なぜならば、この行為は、護法場側から見れば、本山からの護法場への発展を妨げるための干渉だったと受け取られました。

開校した三ヶ月にも満たない頃、報恩講という親鸞の記念式典の前夜に、護法場と本山の間に初めての衝突がありました。大谷派と護法場からの様々な立場の代表者会議で、本山の指導部は本山の再建と明治政府にお金を貸し付けるという理由で大谷派が大きい負債を抱えた状況について発表しました。本山の指導部によると、この宗派の経済的な理由で、護法場は小規模に継続しなければならないと論じました。この直後、怒った護法場の学生は本山に対して、さらに説明を要求しました。ただし、本山当局は怒った護法場の学生に対して回答せず逃げようとしてしました。『百年史』によると、護法場の学生は本山の当局者を追いかけ、結局、「彼らは、障子を蹴破って逃げ出す醜態を演じた」ということです。⁹

本山によると学寮と護法場は分かちがたいと言いましたが、学寮と護法場という両機関の実際の関係について、一般的には二つの派閥になったと言われています。¹⁰新改革派と非改革派の学生間の食い違いは次第に深くなりました。1868年12月11日に一つの激しい対立が起こりました。その際、護法場側からの新改革派の学生は黒袈裟を着、学寮側からの非改革派の学生は青袈裟を着ました。この論争が理由かどうかは不明ですが、本山は宗派内での仏教以外のいわゆる外学の価値や宗派内での位置付けについて一定の見解を示すことができなかつたようです。例をあげると、本山は護法場の発展や権力の行使を阻むと同時に、外学の研究者を別院から募集しました。

1869年3月に3人の護法場の学生は直接本山に行き、次のような手紙を出しました。

護法場開設以来、諸国有志の青年これに集まり、主に神・儒および外教の典籍等、時事に適切なる学科を研究する目的なりしが、中には王政御一新の趣にもとづき、御本山の弊政を改革せんとて、種々の計画をめぐらす徒もこれあり。¹¹

このような改革の計画は、資料に残っていませんが、二次資料によると、計画は本山の指導部に属している俗役を辞任させ、その代わりに、僧侶を指導部に招いたということです。手紙を受け取ってすぐに、本山は激怒し、3人の学生を捉えようとしてしました。しかし、その3人は辛うじて逃げるのができ、護法場に身を寄せました。結局、本山は何人かの革新的な学生や教員を罰したにもかかわらず、そのような改革を実行しました。つまり、俗役を辞

⁸ 南条 1927: 17.

⁹ 『大谷大学百年史』 2001a: 47.

¹⁰ 『大谷大学百年史』 2001a: 48.

¹¹ 『大谷大学百年史』 2001a: 49.

任させ、その代わりに、僧侶を指導部に招く等の改革を試みたのです。さらに、これ以外に採用した改革は、僧侶、信者、学生等を一箇所に集め、お互いに意見を述べるために、「衆議所」という場所を設立しました。

「100年史」の記述にもう一度目を移せば、外からの視点で客観的に大谷派という宗派を見ることができるので、進歩的な学生達はこうした特徴を評価しました。一方、保守的な本山当局は「閉鎖的」とであると100年史では描写されています。¹²「100年史」のこうした描写が重要であると思われる理由は、現在の大谷大学の観点から見ると、保守的な本山より進歩的な護法場の方が高い地位に位置付けられていることが分かるからです。

これらの発展は別として、非改革派は、宗門の学問以外の学科の教育が大谷派にとって危険因子であると言いました。保守的な学寮講師である賢殊院得住げんじゅいんとくじゅうから次のような発言がありました：

仏法破滅するは釈尊の御弟子の力なり。勤めて排仏を排すれば、排仏いよいよ多くなり、勇んで耶蘇いよいよ多くなるは自然の道理。外教を破するには自力を捨てて、釈尊の神力をかるには如かず。¹³

以上は、得住が他の教を払拭するために外学を勉強することに反対し、仏教の教えだけを勉強させることを説いたのです。進歩的な学生と保守的な本山の両方は、この懸念と危機感を経験しましたが、それぞれの反応が異なりました。進歩派は仏教の批判者を効果的に跳ね返すために、批判者の教えについて深い知識が必要だと論じました。逆に、保守派は宗門学を強化していく方がいい防衛策になると論じました。この二つの観点は仏教教育における抗争の中心となり、二つの派の間の持続的な対立関係は、明治時代における大谷派の組織内で重要な改革に繋がりました。

この対立関係における一つの具体的な事例は、護法場と学寮の有力な講師、闡彰院空覚という改革者の暗殺でした。空覚は、1804年に京都（唯明寺）に生まれ、その後奈良の徳願寺の舎弟になりました。若い頃に関しての情報は少ないのですが、1835年に京都の伏見西方寺で住職となりました。最初は、義澄と称し、法名が空覚でした。その後、東瀛とうえい、瀛州えいしゅうと名乗り、闡彰院と号したということです。雲華院大含うんげいんだいがんという、学寮の講師で詩文や絵画の作品も創作した先生の下で勉強しました。1849年に大含が講師の職を退いた際、45歳の空覚は学寮ぎこうの擬講という役職に就きました。2年後、1851年に、空覚は「屯城事件」と呼ばれる大谷派で悪名高い「異安心いあんじん」と呼ばれる異端派による事件に巻き込まれました。この事件に空覚が参加した結果、1863年まで僧職から除名されました。しかし、1865年にもう一度学寮の講師になることが許されました。その3年後、護法場の設立の活動のための指導をしました。護法場で空覚の在任中、次のような学科、漢訳版聖書、ジョン・バニヤーン『天路歷程』を通じてみたキリスト教の教え、親鸞『二種深信』、『易行品』、『散善義』、『釈教正謬』、『玄義分』、『神国決疑編』、『破邪頭

¹² 『大谷大学百年史』2001a: 49.

¹³ 『大谷大学百年史』2001a: 53.

正鈔』等を講義しました。香山院竜温によって影響を与えられた、指導者としての空覚は、大谷派にとって将来指導者になるような学生を育てました。しかし、1871年に暗殺されました。残念ながら、暗殺者は突き止められませんでした。ライバルである保守的な俗役の行為だと普く信じられています。なぜなら、これらの俗役のライバルは、空覚の指導の下で宗派組織を改革した結果、俗役が宗派の組織から追い落としを果たしたため恨みを買いました。

空覚の死後、二人の弟子、石川舜台いしかわしゅんたい (1842-1931) と渥美契縁あつみかいえん (1840-1906) は大谷派の指導者になりました。しかし、二人は大谷派の方向性についての議論において対極に位置しており、結局、お互いに好敵手になりました。一方で、石川は欧米への見学旅行を計画し、翻訳局を設立し、大谷派内の人材育成のための奨学金を始めました。他方で、渥美は大谷派の巨額の負債を支払い、開祖堂と阿弥陀堂の大規模な工事プロジェクトを優先しました。この二人の異なるアプローチは、急速なグローバル化や近代化社会での保守派と進歩派の反応の差異を表しています。¹⁴

護法場は1873年に閉鎖されましたが、1871年から閉鎖されるまでの二年間に護法場に関する資料は少ないです。この資料不足の原因については、100年史によると、1871年の宗派改革の目的は既に実現したという理由を挙げています。護法場を設立する際に宗派の門戸を開くことはある程度成功しました。そして1871年までに、多くの護法場の僧侶とかれらを味方する僧侶は俗役から宗派組織内の頂点に位置する当局の指導部に配置されました。

結論：護法場のインパクトの分析

結論として、護法場の短い歴史は明治初期における仏教界の中での学問的、精神的な議論を反映するミクロコスモスとして理解できると思われます。この時期、政治、文化、経済の転換に応じるために、いわゆる”marketplace of ideas”「思想の自由市場」が現れました。この思想の自由市場の中で、大谷派の保守派は伝統的な宗派の考え方や習慣を守ることを中心として、宗派の根本に戻るべきだと論じました。このアプローチは、仏教教育に関連して、宗門の教義や儀礼を強調しながら、仏教以外の学問、つまり外学を意図的に無視することです。進歩派は、これほどまでの大規模な転換期を乗り切るためには、伝統に戻るべきではなく、時代の流れに溶け込み、新たな枠組みを作り替えるべきだと論じました。しかし、この作業は、改革者によって違う意味を持ち、様々な改革者から多様な運動が生じたのです。これらの運動は、統一仏教、各宗派の仏教教育、神道と儒教の併合、西洋の科目を学ぶカリキュラムを僧侶学科に入れること、トランスナショナルな学問の交流等、異なった方法や目的がありました。多くの進歩派の運動は実現には失敗したにもかかわらず、明治後期までに、ほとんどの主な宗派は教育に関連した進歩的な改革が実施されました。¹⁵

明治仏教教育の改革の中で、最もインパクトがあった改革は伝統的な学寮から、近代的な大学への移行でした。日本仏教の主な宗派にとって、大学モ

¹⁴ Inoue 2012.

¹⁵ 一つの例外として、真言宗の遅い改革については、阿部 (2014)を参照。

デルを変更する理由は多かったのですが、近代的な機関と仏教とをうまく結びつける可能性を示すのが大きい理由でした。ただし、この新しい教育モデルは問題を解決しながら、同時に新たな問題を作り出しました。日本仏教界の保守派にとって、この大学モデルで仏教以外の学科、つまり外学を含むことは宗派として世界をどう捉えるかという観点への脅威になることを心配しました。大谷派のプロトタイプの大学、つまり護法場の栄枯盛衰の歴史から、明治時代の政治、宗教、教育などから発展した複雑な問題や宗派内の対立が見られます。

政治的なインパクト

護法場の使命、つまり仏教を守るために仏教の批判者の教えを理解することは、京都にある護法場に限らず、卒業生の移動を通じて、他の地方に広がりました。時には、護法場の卒業生の行為が政治的に深刻な結果をもたらしました。有名な例を挙げると、石川台嶺(1842-1871)と星川法沢(1833-1873)という二人の護法場の卒業生は三河大浜騒動を指導しました。ケテラー^{いしかわたいれい}氏の著書『邪教/殉教の明治—廃仏毀釈と近代仏教』には大浜騒動が詳しく説明されておりますので、本発表は、概略のみに触れたいと思います。1869年に卒業した際、石川と星川は愛知県で「三河護法会」というグループを設立しました。明治政府の廃仏毀釈などが増加する敵対行為への反応のため、三河護法会は数千の会員を突然招集しました。政府と護法会員の間に緊張が高まり、結局、1871年の会議で若い役人が護法会員の中にいた暴徒によって襲撃され殺されました。果ては、77人が逮捕されたのですが、そのうちの、51人が僧侶でした。星川は10年の追放の刑を言い渡されましたが、判決が下りる前に刑務所で亡くなりました。石川は騒動の主な指導者として死刑により斬首されました。死亡者に加えて、浄土真宗全体は、この時政府から新たに厳しく統制されています。この統制は特に旅行と集会を制限しました。¹⁶ 石川と星川は、護法場で習ったことを初めて実践しました。彼らのたゆまぬ努力の結果は、それらの問題の深刻さの証拠として理解できると思われます。外学と進歩的な改革者を地方に配属させるとともに、護法場はキリスト教につ^{ちわや}いての研究を集積するために、護法場の指導者千巖と関信三(1843-1880; 法名: 猶龍^{ゆうりゅう})を長崎に送りましたが、この長崎への派遣は護法場のキリスト教の研究に貢献しました。¹⁷ この時、関は密偵として政府のために働き、1872年までキリスト教徒の活動について連絡しました。

知識の伝承から知識の創造へ

護法場と本山は、僧侶教育内で外学の位置づけについて何度も対立したにもかかわらず、外学の研究者を募集する等の本山を通じて外学の知識を習得する重要性を認めたことが分ります。外学の研究者を募集する他に、大学院の設立や仏教の学術雑誌の刊行や仏教の普及等は仏教教育にとって、さらに大幅な移行の一部といえます。その移行とは、知識の伝達から知識の生産という現象だと考えられます。この現象は、様々な社会文化的な理由で、科

¹⁶ Ketelaar 1991: 83.

¹⁷ 『大谷大学百年史』2001a: 46.

学的方法に価値を置き、それらを奨励し、西欧の高等教育においても知識の伝達から知識の生産という同様の移行が行われました。¹⁸ ジョーン・ロバーツ氏によると、1860年代から1870年代にかけて、アメリカの宗教系大学の努力の方向性には、「科学と啓示を融合する」ことから「科学の発見を考慮し、聖書の解釈を変化させる」という動向がありました。¹⁹ アメリカのように日本の先行学問は近代科学の考え方にうまく対応できなかったため、新たな基準や教育目的を反映する学問の生産の重要性を明らかにしました。

その上、林淳氏が述べているように、明治時代に仏教系大学を持つ宗門は、大学を持たない宗門と比べれば、今まで以上に資料を収集することや学問を生産する状況になり、現在においてももっとも力がある宗門を意味します。この点を検討すれば、近代における知識の生産への移行というインパクトはさらに重要だと思われます。²⁰ つまり、比較的小さい宗門は、教育の斬新な発展に対し大谷派が時宜を得た反応をすることは、有利な地位を獲得し、さらに国内と国際の教育ネットワークの構築にうまく携わることにつながっていくのです。

僧職の職能化

ケテラー氏が指摘したように、江戸時代に仏教僧侶の社会的身分は受け継がれるものでした。²¹ しかし、明治政府による寺請制度の廃止後、様々な非仏教の政策を通じて、仏教僧侶の社会的身分が落ちました。それらを伝承する代わりに自身の努力によって社会的身分を向上させることが可能になりました。つまり、明治時代から僧職というのは、身分より、職業と考えた方がいいということです。従って、僧侶の職能化の過程で、人材育成は重要な役割を果たしました。護法場の活動は、早期の「人材登用」の一種として考えられます。しかも、明治時代の国家的な教育政策により一般人の平均教育レベルが上昇し、僧侶達の平均教育レベルに近づきました。その理由で、僧侶達にとって一般人と比較すると教育における特権階級という地位はだんだん維持し難くなりました。護法場のようなプロトタイプの大学は、人材登用や高等教育を提供することにより、僧侶達の平均教育レベルが上がると同時に、多くの僧侶は教育者になりました。その結果、仏教界の身分の問題と教育問題は解決しやすくなりました。つまり、護法場のような近代的な高等教育機関は僧侶の職能化をもたらしました。さらに、僧侶達が教育者になることを以て、仏教は国家に利益をもたらす一種の方法だと考えられます。その例として明治初期の大教宣布運動に7千人の大教院の「教導職」の中で、半分以上は仏教徒だったことがあげられます。1885年に大教院が閉鎖された後、様々な政策で仏教徒は、教育者の役割を維持するための権威を擁護しました。結局、大正時代には、宗教系大学の卒業生に教員免許を出すことになりました。

今後の研究について

¹⁸ Roberts and Turner 2000.

¹⁹ Roberts and Turner 2000: 980.

²⁰ Hayashi 2014.

²¹ Ketelaar 1991.

最後に、今後の研究の主題は、護法場の歴史が指摘したように、仏教高等教育の目標について考えることです。護法場のケース・スタディが重要な課題を浮き彫りにします。まず、仏教系大学の主な目標はなんでしょうか。その目標は、僧侶の教育のためでしょうか。それとも、信者の教育のためでしょうか。あるいは、両方のためでしょうか。その目標は、宗学に基づいている一般の教育を提供するのでしょうか。あるいは、宗派の主な経典や聖人についての専門的な研究を行うのでしょうか。もし後者であれば、この研究はだれのためのものなのでしょうか。これらの質問は、明治時代に様々な急速な転換によってもたらされ、現在まで宗派と仏教系大学の間の懸念になっている課題につながります。幾つかの仏教系大学が繁栄していると同時に幾つかの仏教系大学が衰退し、これらの課題を検討する重要性を示唆していると思われれます。

参考文献

ABE Takako 阿部 貴子

2014 Meijiki shingonshū no daigakurin kyōiku—futsūgaku dōnyū wo meguru giron to jissai 明治期真言宗の大学林教育—普通学導入をめぐる議論と実際. In *Kindai nihon no daigaku to shūkyō* 近代日本の大学と宗教, Eds. Ejima Naotoshi 江島尚俊, Miura Shū 三浦周, and Matsuno Tomoaki 松野智章. Kyoto: Hōzōkan, 169-202.

EJIMA Naotoshi 江島 尚俊 et al, eds.

2014 *Kindai nihon no daigaku to shūkyō* 近代日本の大学と宗教. Kyoto: Hōzōkan

EJIMA Naotoshi 江島 尚俊

2014 *Kindai nihon no kōtō kyōiku ni okeru kyōiku to kyōka* 近代日本の高等教育における教育と教化. In *Kindai nihon no daigaku to shūkyō* 近代日本の大学と宗教, Eds. Ejima Naotoshi 江島尚俊, Miura Shū 三浦周, and Matsuno Tomoaki 松野智章. Kyoto: Hōzōkan, 3-32.

HAYASHI Makoto 林 淳

2002 *Kindai ni okeru bukkyōgaku to shūkyōgaku* 近代における仏教学と宗教学. *Shūkyō kenkyū* 宗教研究, 333, 29-53.

2009 *Shūkyō kei daigaku to shūkyōgaku* 宗教系大学と宗教学. *Kikan Nihon Shisōshi* 季刊日本思想史, 72, 71-88.

2010 *Gakumonshi kara mita bukkyōshigakkai* 学問史から見た仏教史学会. *Bukkyōshigaku kenkyū* 仏教史学研究, 53-1, 103-114.

2012 *General Education and the Modernization of Japanese Buddhism. The Eastern Buddhist*, 43-1/2, 133-152.

2013 *The Birth of Buddhist Universities. Japanese Religions Special Issue 'The Politics of Buddhist Studies in Early Twentieth-Century Japan.'* Vol. 39 Nos. 1 & 2, Spring & Fall, 11-29.

2014 Religious Studies and Religiously Affiliated Universities. In *Modern Buddhism in Japan*, Eds. Hayashi Makoto, Ōtani Eiichi, and Paul Swanson. Nanzan Institute for Religion and Culture, 163-193.

INOUE, Takami 井上 尚実

2012 Shūmon hakusho wo megutte: Ishikawa Shuntai no kadai 『宗門白書』をめぐって: 石川舜台の話題. In *Kyōka kenkyū* 教化研究 151, 47-56.

ISHIDA Kazuhiro 石田 一裕

2014 Shūkyō Daigaku ni okeru kindai bukkōgaku—Watanabe Kaikyoku no toō to kōgi wo chūshin ni 教大学における近代仏教学—渡辺海旭の渡欧と講義を中心に. In *Kindai nihon no daigaku to shūkyō* 近代日本の大学と宗教, Eds. Ejima Naotoshi 江島尚俊, Miura Shū 三浦周, and Matsuno Tomoaki 松野智章. Kyoto: Hōzōkan, 279-304.

JAFFE, Richard M.

2001 *Neither Monk Nor Layman: Clerical Marriage in Modern Japanese Buddhism*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

JANSEN, Marius B, and ROZMAN, Gilbert.

1986 *Japan in Transition, from Tokugawa to Meiji*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

JOSEPHSON, Jason Ananda.

2012 *The Invention of Religion in Japan*. Chicago, I.L.: University of Chicago Press.

KETELAAR, James Edward.

1993 *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

KLAUTAU, Orion.

2008 Against the Ghosts of Recent Past: Meiji Scholarship and the Discourse on Edo-Period Buddhist Decadence. *Japanese Journal of Religious Studies* 35.2, 263-303.

2012 *Kindai nihon shisō to shite no bukkō shigaku* 近代日本思想として仏教史学. Kyoto: Hōzōkan.

MIURA Shū 三浦 周

2014 “Gakushū” sareru bukkō—Taishō, Showa shoki no shūmon Daigaku ni okeru kariyuramu no hensen to sono tokushitsu 『学習』される仏教——大正・昭和初期の宗門大学におけるカリキュラムの変遷とその特質. In *Kindai nihon no daigaku to shūkyō* 近代日本の大学と宗教, Eds. Ejima Naotoshi 江島尚俊, Miura Shū 三浦周, and Matsuno Tomoaki 松野智章. Kyoto: Hōzōkan, 203-250.

NANJŌ Bunyū 南条文雄

1927 *Kaikyūroku* 懐旧録. Daiyūkaku.

NISHIMURA Ryō 西村 玲

2007 Tokumon fujaku: Sono shōgai (1701-1781) 徳門普寂：その生涯 (1701-1781). *Indotetsugaku Bukkyōgaku kenkyū* インド哲学仏教学研究 14, 87-99.

ŌTANI Eiichi 大谷 栄一

2009 “Kindai bukkyō ni naru” to iu monogatari: Kindai nihon bukkyōshi kenkyū no hihanteki keishō no tame no riro 『近代仏教になる』という物語—近代日本仏教史研究の批判的継承のための理路. *Kindai Bukkyō* 近代仏教 16, 1-26.

Ōtani daigaku hensan iinkai 大谷大学百年史編纂委員会, ed.

2001a *Ōtani daigaku hyakunenshi* 大谷大学百年史. Kyoto: Ōtani daigaku.

2001b *Ōtani daigaku hyakunenshi shinryōhen* 大谷大学百年史<資料編>. Kyoto: Ōtani daigaku.

PARAMORE, Kiri.

2009 Anti-Christian Ideas and National Ideology: Inoue Enryō and Inoue Tetsujiro’s Mobilization of Sectarian History in Meiji Japan. In *Sungkyun Journal of East Asian Studies* 9.1, 107-144.

REITAN, Richard M.

2010 *Making a Moral Society: Ethics and the State in Meiji Japan*. Honolulu, H.I.: University of Hawai‘i Press.

RHODES, Robert F.

2011 Introduction to “A Translation of ‘Otani Daigaku’s Founding Spirit’ by Sasaki Gessho.” Michael Conway, Takami Inoue, and Robert F. Rhodes, trans. *Shinshū Sōgō Kenkyūjo Kenkyūkiyō* 真宗総合研究所研究紀要, no. 30, 1-31.

ROBERTS, Jon H. and TURNER, James

2000 *The Sacred and the Secular University*. Princeton, N.J.: Princeton University Press. Kindle Edition.

SAWADA, Janine Anderson.

2004 *Practical Pursuits: Religion, Politics, and Personal Cultivation in Nineteenth-century Japan*. Honolulu, H.I.: University of Hawai‘i Press.

STAGGS, Kathleen M.

1983 ‘Defend the Nation and Love the Truth’. Inoue Enryō and the Revival of Meiji Buddhism. *Monumenta Nipponica* 38.3, 251-281.

STONE, Jacqueline.

1990 A Vast and Grave Task: Interwar Buddhist Studies as an Expression of Japan’s Envisioned Global Role. In *Culture and Identity: Japanese Intellectuals During the Interwar Years*, Ed. J. Thomas Rimer. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

SUEKI Fumihiko 末木 文美士

- 1998 *Kamakura bukkyō keiseiron: Shisōshi no tachibakara* 鎌倉仏教形成論——思想史の立場から. Kyoto: Hozokan.
2004 *Meiji shisōka ron* 明治思想家論. Tokyo: Transview.

TANIGAWA Yutaka 谷川 豊

- 2008 *Meiji zenki no kyōiku, kyōka, bukkyō* 明治前期の教育・教化・仏教. Kyoto: Shinbunkaku.
2009 “Kyō” no jidai-- Kindai nihon keiseiki no bukkyō to minshū kyōka, sōryo yōse, zokujin kyōiku 「教」の時代—近代日本形成期の仏教と民衆教化・僧侶養成・俗人教育. *Kikan Nihon Shisōshi* 季刊日本思想史 1.75, 36–53.